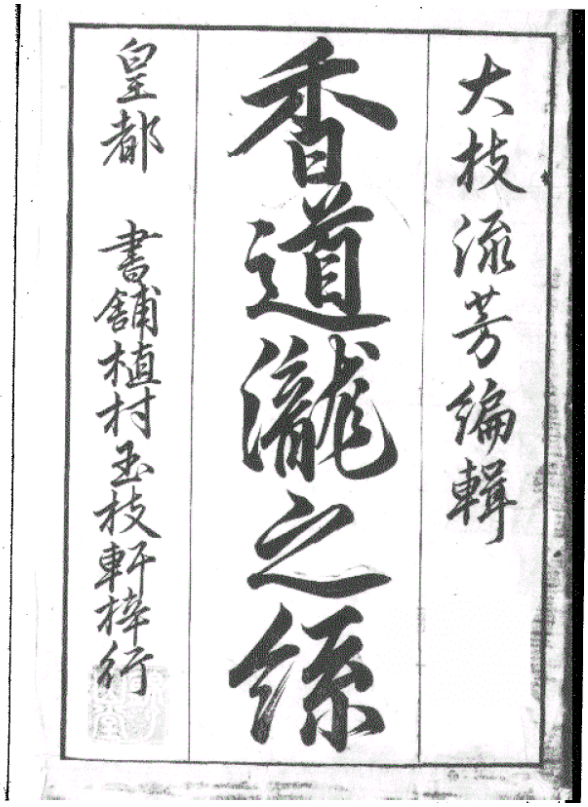


大枝流芳編輯

香道瀧之絲

皇都　書舗植村玉枝軒梓行

大枝流芳編　享保十九年　一冊　版本

大阪府立図書館　所蔵

［挿絵］

【凡例】

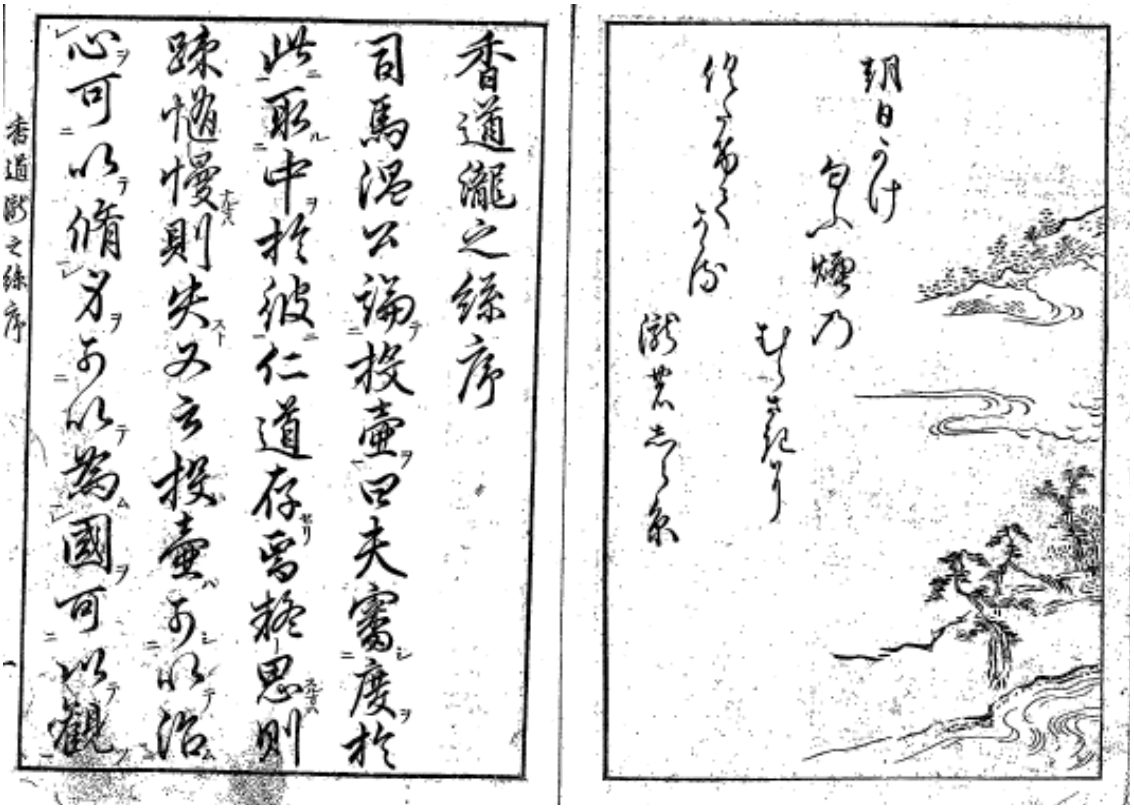
① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。

② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。

③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。

④ 青字の（）は、筆者の補足です。

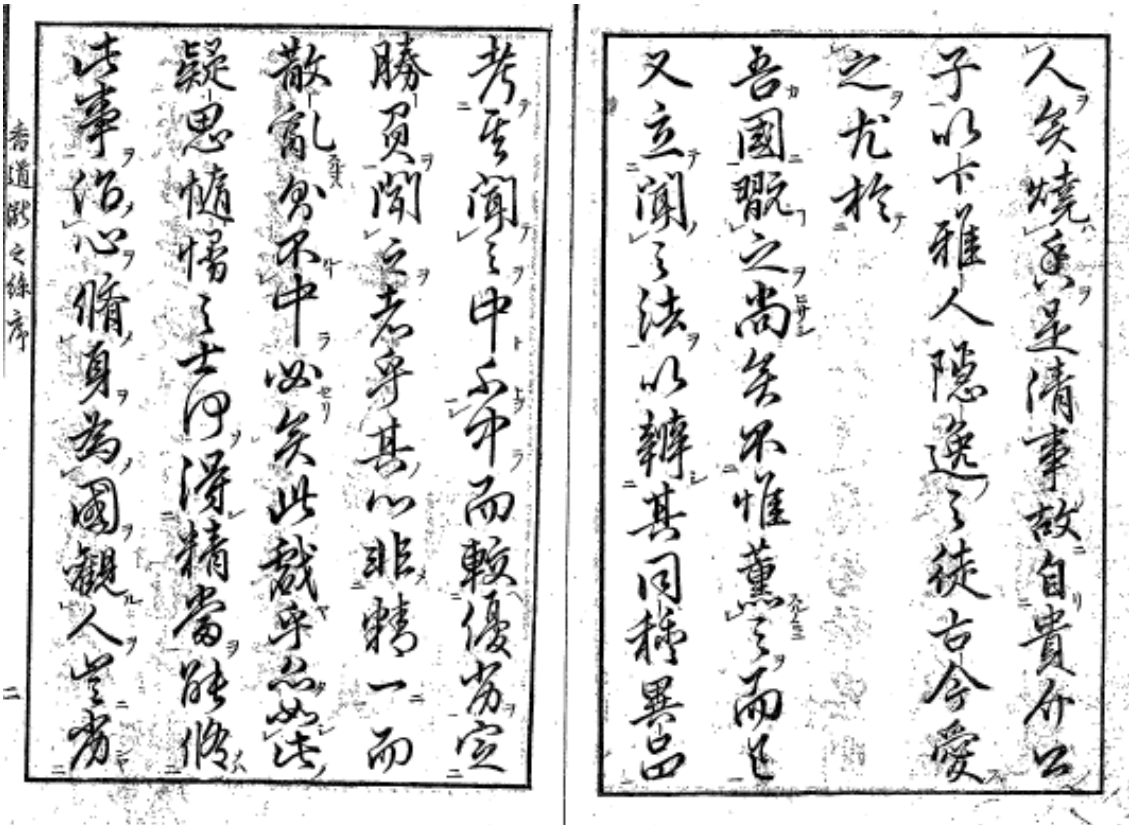
⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。



朝日かげ
　匂ふ煙の
　　むらさきに
くだけてかかる
　　瀧のしら糸

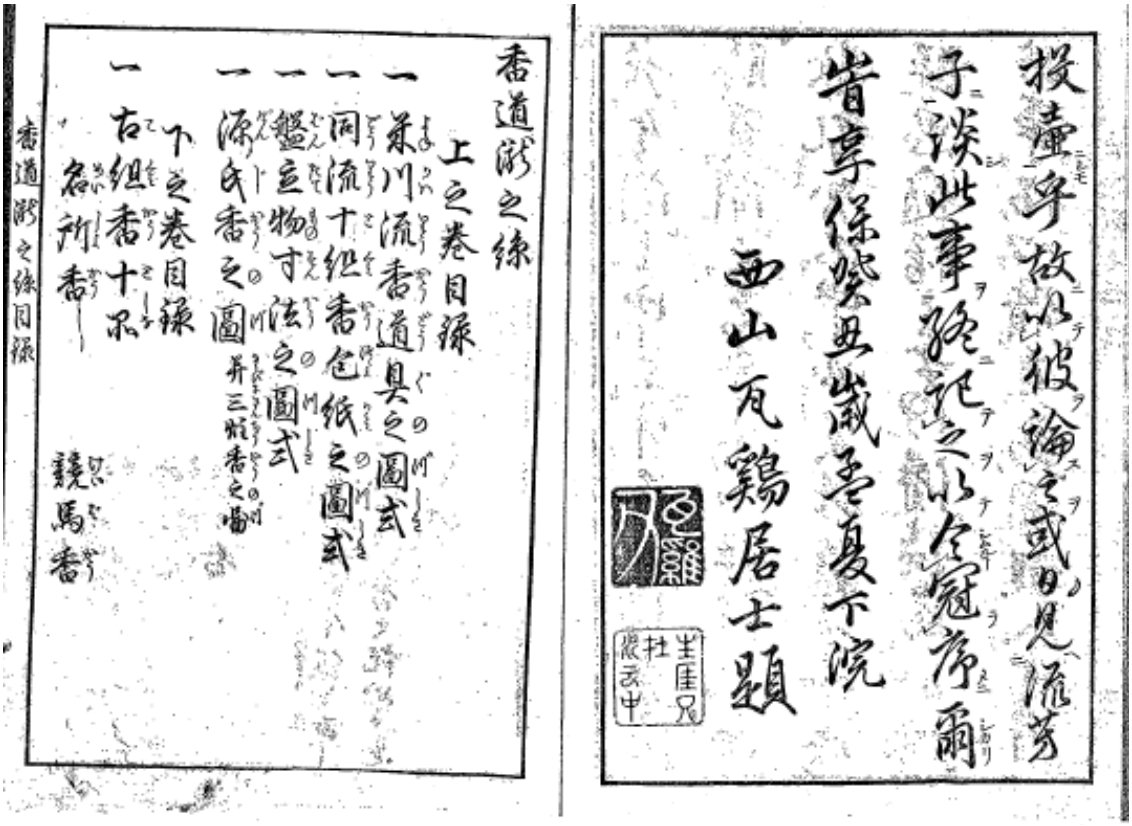
香道瀧之絲序

司馬温公、投壺を論じて曰く「夫れ、度を此れに審し、中を彼れに取る、仁道存せり（焉※）。疑思する寸（とき）は、則ち疎なり。惰慢なる時は則ち失す。」と。また云わく、「投壺は、以て心を治むべし。以て身を修むべし。以て国を為（おさ）むべし。以て人を観ずべからん（矣※）。」と。



香を焼くは、これ、清事ゆえに、貴介公子より
以下、雅人、隠逸(いんいつ)の徒(ともがら)、古今これを愛す。
尤も、
吾が国において、これを翫ぶこと尚(ひさし)なり(矣※)。唯これを
薫ずるのみあらず。
また、この聞きの法を立てて、以て、其れ、同種、異品を弁じ、
其れ、これを聞きて中りと中らざるとを考えて、しかして優劣を較
べ、勝負を定む。これを聞く者や、其の心、精一に非ずして、
散乱するときは、則ち中らざる事必せり(矣※)。この戯や只かくの
如し。
疑思惰慢の士、何んぞ、精當を得ん。能くこの事を修めば、心を治
め、身を修め、国を為め、人を観る、豈(あに)投壺にしも劣らんや。

※ 語や文の終わりに置いて語調を強める「置き字」


故以彼論之或日見流芳
子談此事弱記之以冠序爾
皆享保癸丑歳孟夏下浣
西山瓦鶏居士題

香道瀧之絲
上之巻目録
一 米川流香道具之圖式
一 同流十組香包紙之圖式
一 盤立物寸法之圖式
一 源氏香之圖 并三炷香之圖
下之巻目録
一 古組香十品
名所香 競馬香

故に彼を以てこれを論ず。或る日、流芳子に見(まみ)え、この事を談し、終(つい)にこれを記して、以て序(はじめ)に冠らしむることしかり。

皆(とき) 享保癸丑歳孟夏下浣

西山瓦鶏居士題

落款

香道瀧之絲

上之巻目録

一 米川流香道具の図式

一 同流十組香包紙の図式

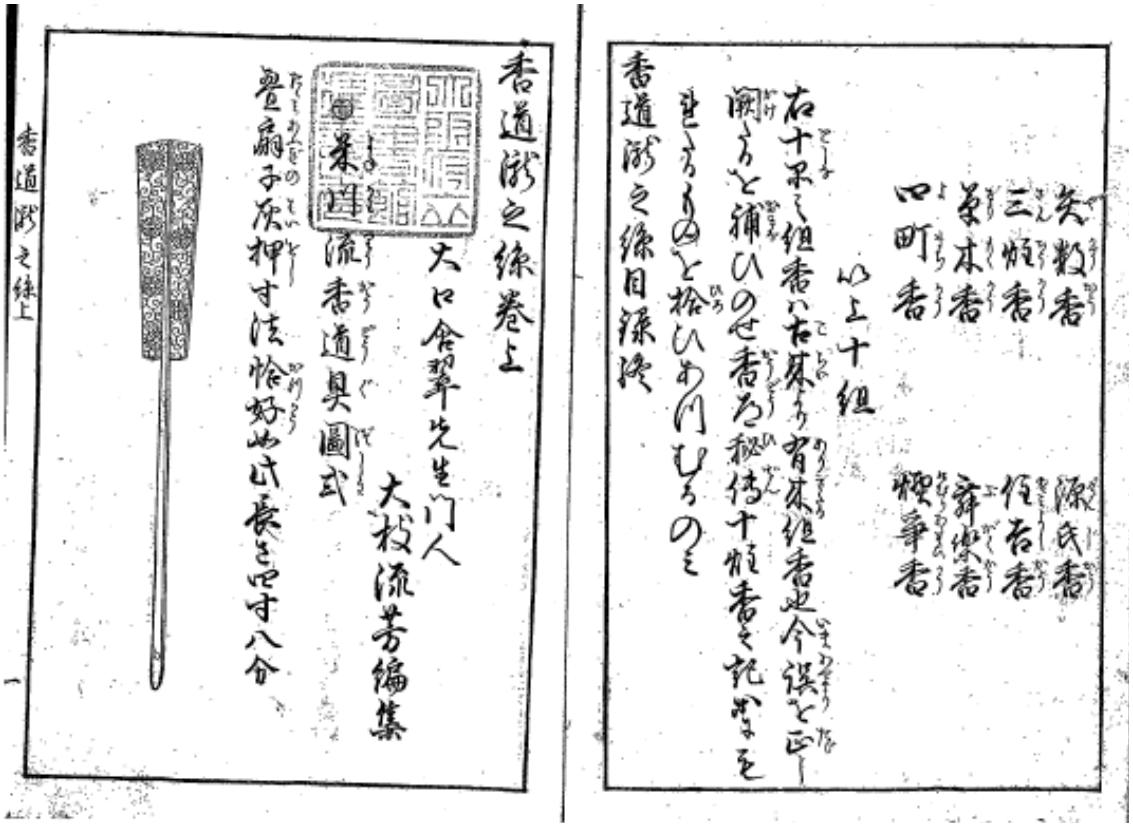
一 盤立物寸法の図式

一 源氏香の図 並び三炷香の図

下之巻目録

一 古組香十品

名所香　競馬香



矢数香　源氏香
三炷香　住吉香
草木香　舞楽香
四町香　煙争香
以上十組
右十品の組香は古来より有り来る組香なり。今、誤りを正し、闕(欠)けたるを補いのせ、『香道秘伝十炷香之記』などにも(漏)れたるものを拾いあつむるのみ。
香道瀧之絲目録終り

香道瀧之絲巻上

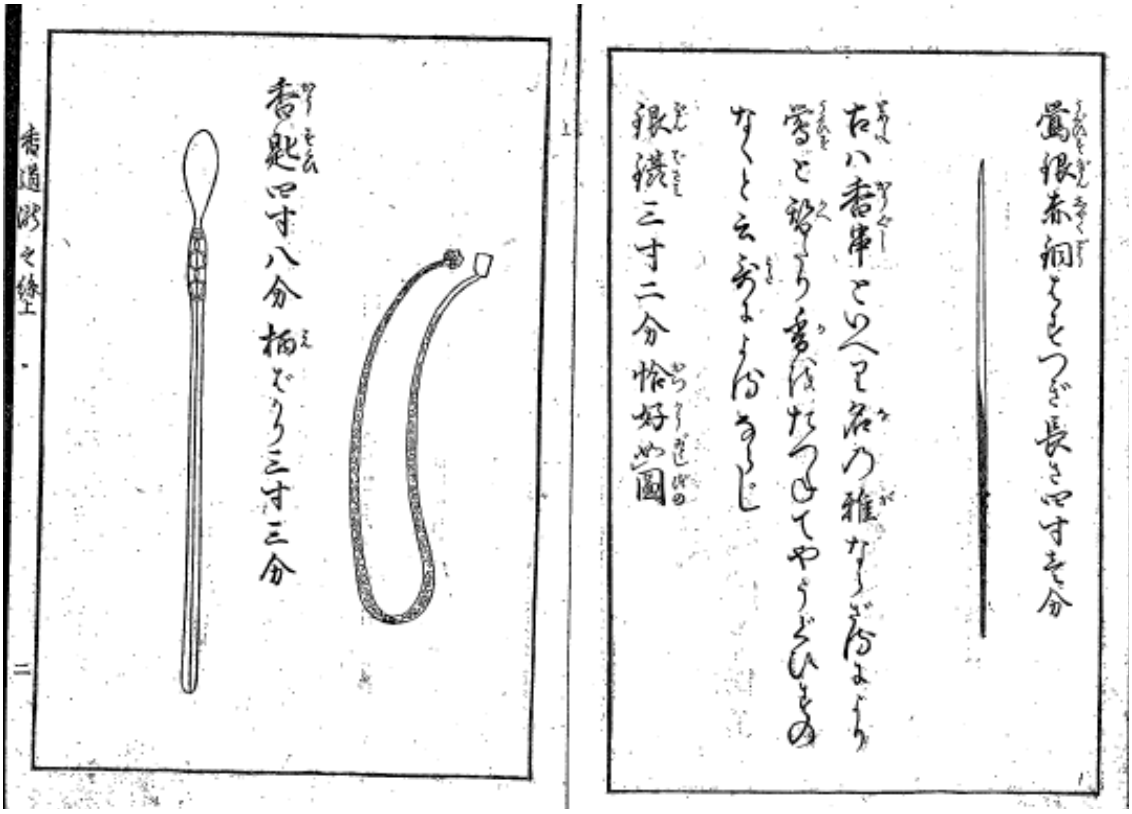
大口含翠先生門人

大枝流芳編集

○米川流香道具図式

畳み扇の灰押(はいおし)寸法、恰好かくの如し。長さ四寸八分

［図］



鶯

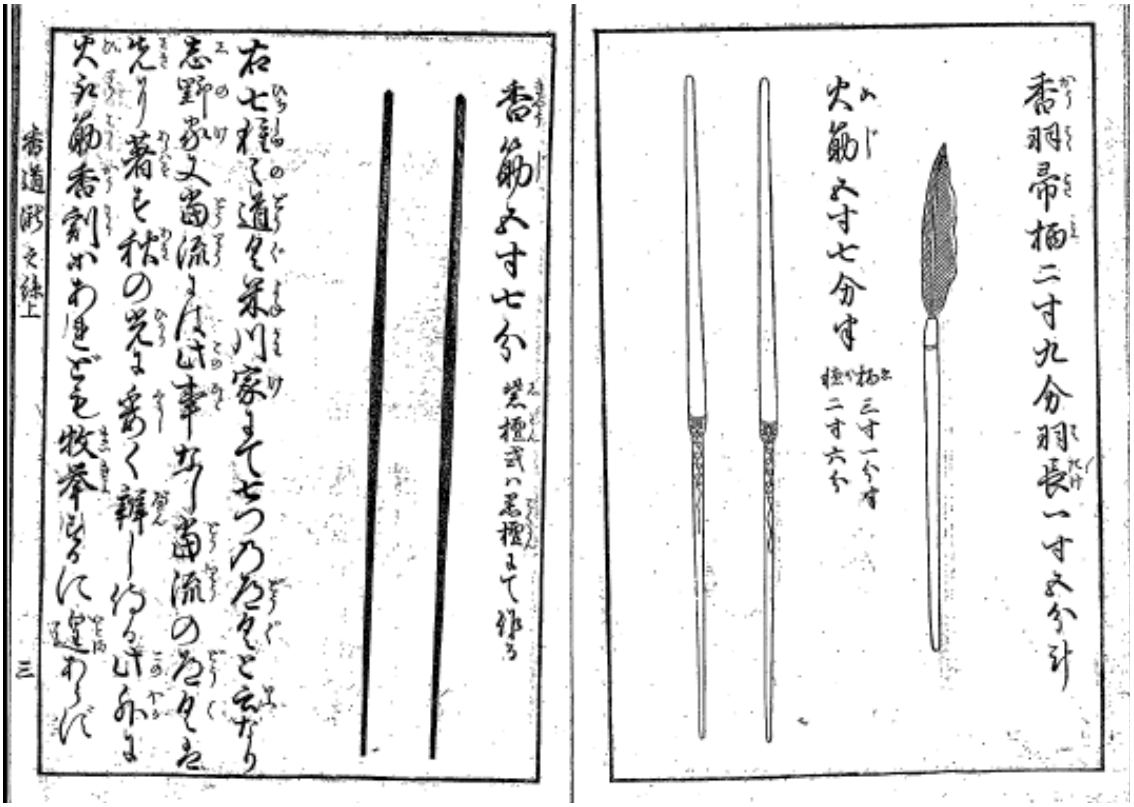
鶯(うぐいす)
銀、赤銅はすつぎ(斜接)。長さ四寸一分
[図]

古は「香串(こうぐし)」といえり。名の雅ならざるにより、「鶯」と替えたり。「香をたずねてやうぐいすのなく」と云う歌によるならじ。

銀鑷(鋏)(ぎんばさみ)
三寸二分。恰好図の如し。

[図]

香匙(こうすくい)
四寸八分。柄ばかり三寸三分。
[図]



香羽帚(こうははき＝はぼうき)

柄、二寸九分。羽長(はたけ)、一寸五分ばかり。

［図］

火筋(こじ)

五寸七分。柄、三寸一分、穂、二寸六分。

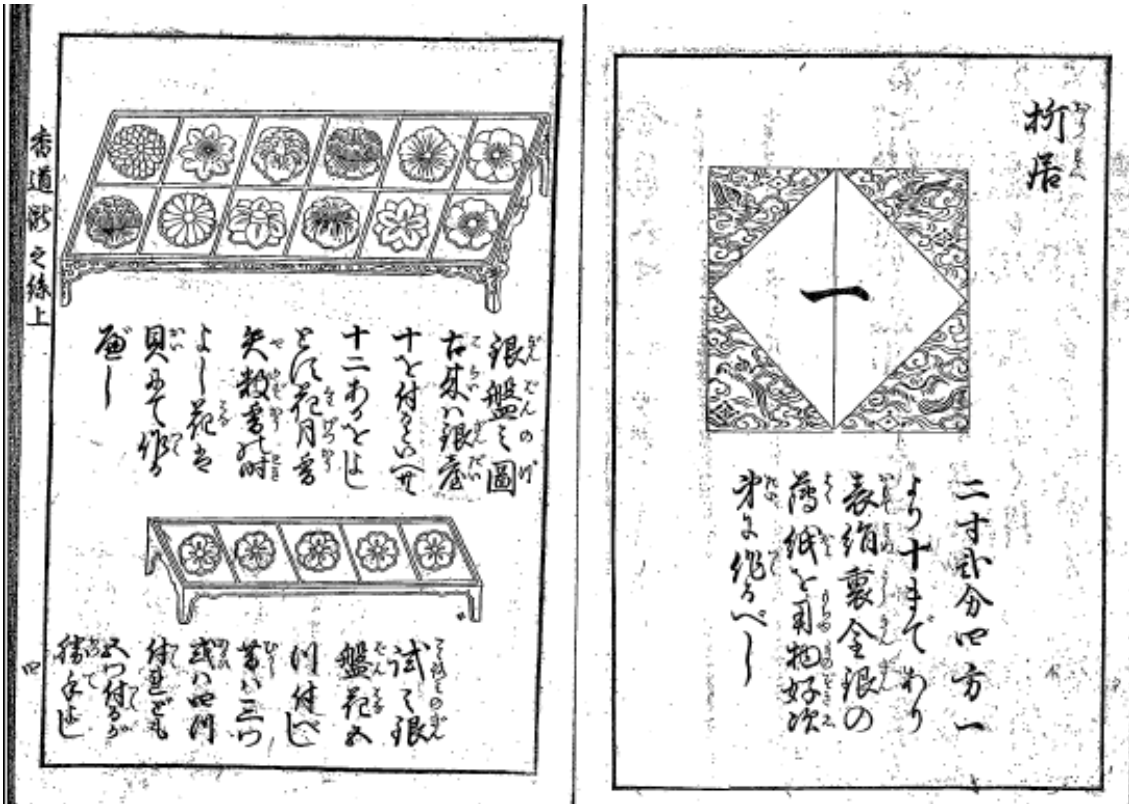
［図］

香筋(きょうじ)

五寸七分。紫檀、或いは黒檀にて作る。

［図］

右、七種の道具、米川家にて「七つの道具」と云うなり。
志野家、また当流にはこの事なし。当流の道具は、
先に著す『秋の光』に委しく辨し侍る。この外、
火取筋(ひどりばし)、香割(こうわり)などあれども、枚挙するに遑
(いとま)あらず。



折居（おりすえ）

［図］

二寸弐分四方、「一」より「十」まであり。

表絹、裏金銀の薄紙（はくがみ）を用ゆ。物好き次第に作るべし。

［図］

銀盤（ぎんばん）の図

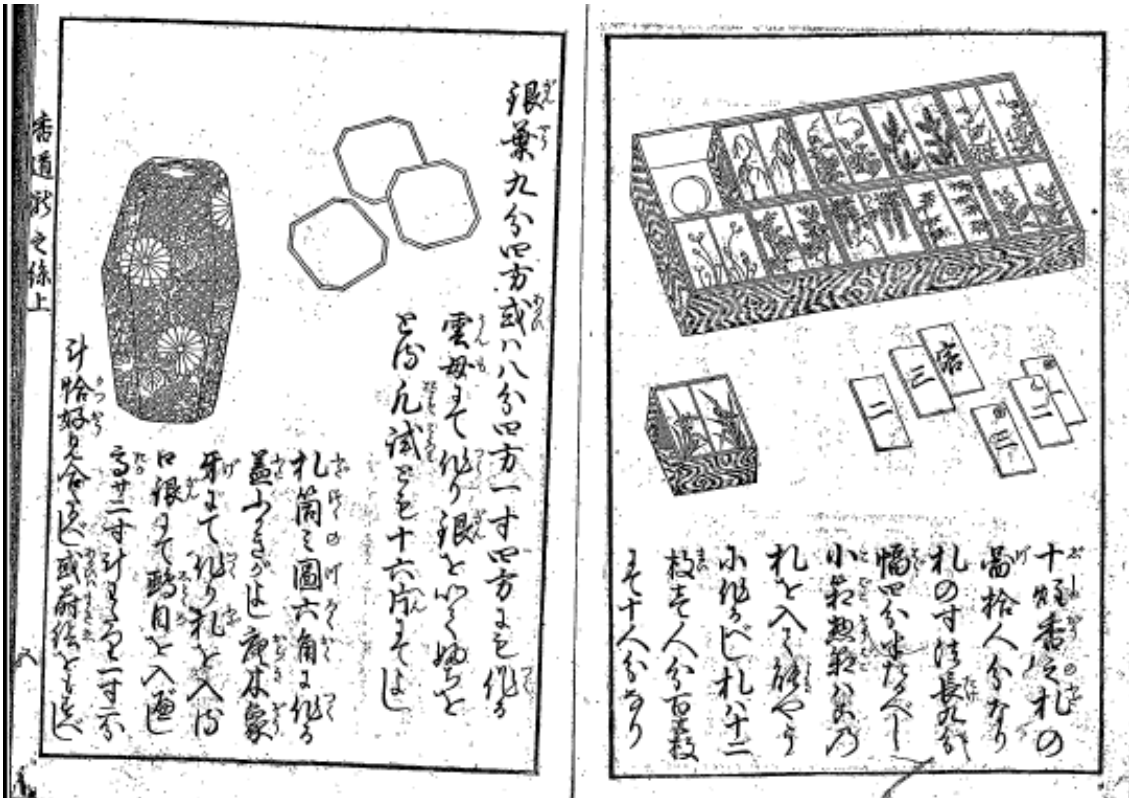
古来は、銀臺（台）、十を付けるといえども、十二あるをよしとす。

「花月香」、「矢数香」の時よし。花は貝にて作るべし。

［図］

試みの銀盤、花五つ付くべし。

昔は三つ、或は四つ付くれども、五つ付くるが勝手よし。



［図］

十炷香の札の図、拾（十）人分なり。

札の寸法、長九分、幅四分半たるべし。

小箱、惣箱は、この札を入れて能きように作るべし。

札は十二枚壱人分、百廿枚にて十人分なり。

銀葉（ぎんよう）

九分四方、或は八分四方、一寸四方にも作る。

雲母にて作り銀を以って、ふち（縁）をとる。

凡そ、試みとも十六片にてよし。

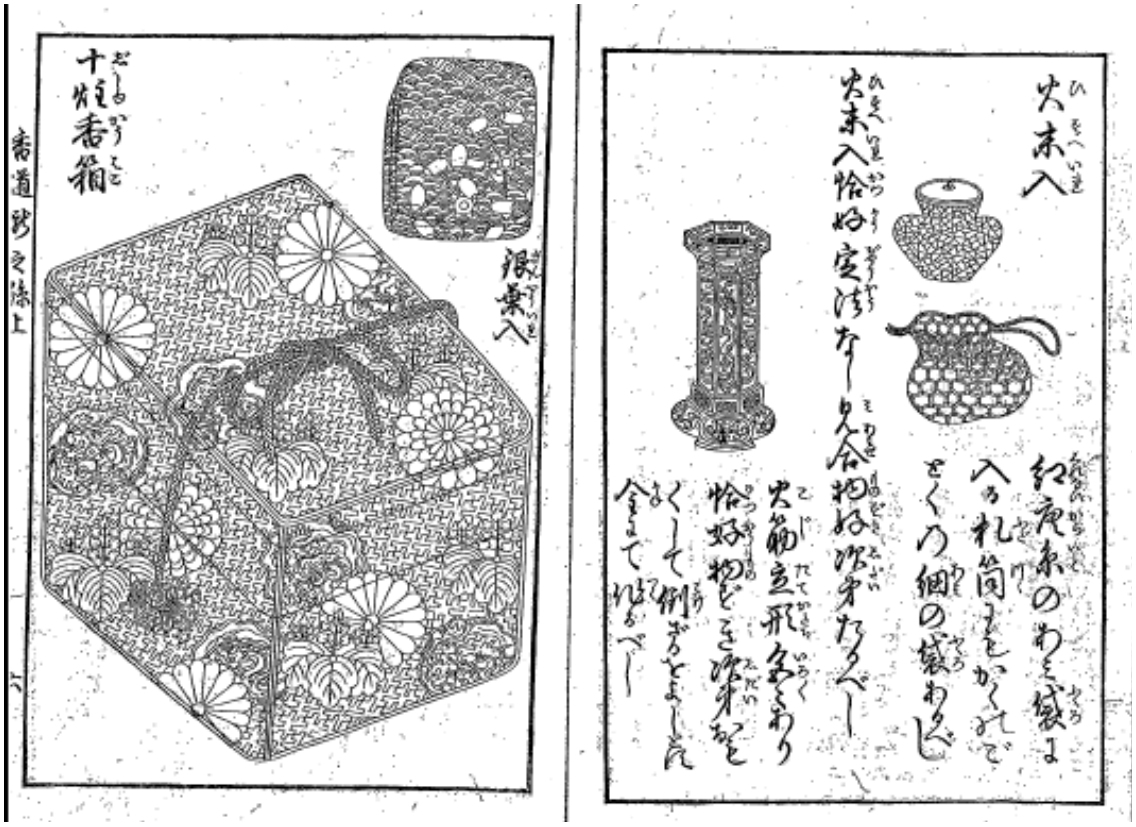
［図］

札筒（ふだづつ）の図、六角に作る。蓋ふかきがよし。

唐木、象牙にて作り、札を入れる口、銀にて鵐目（しとどめ）を入れるべし。

高さ二寸ばかり、わたり一寸二分ばかり。

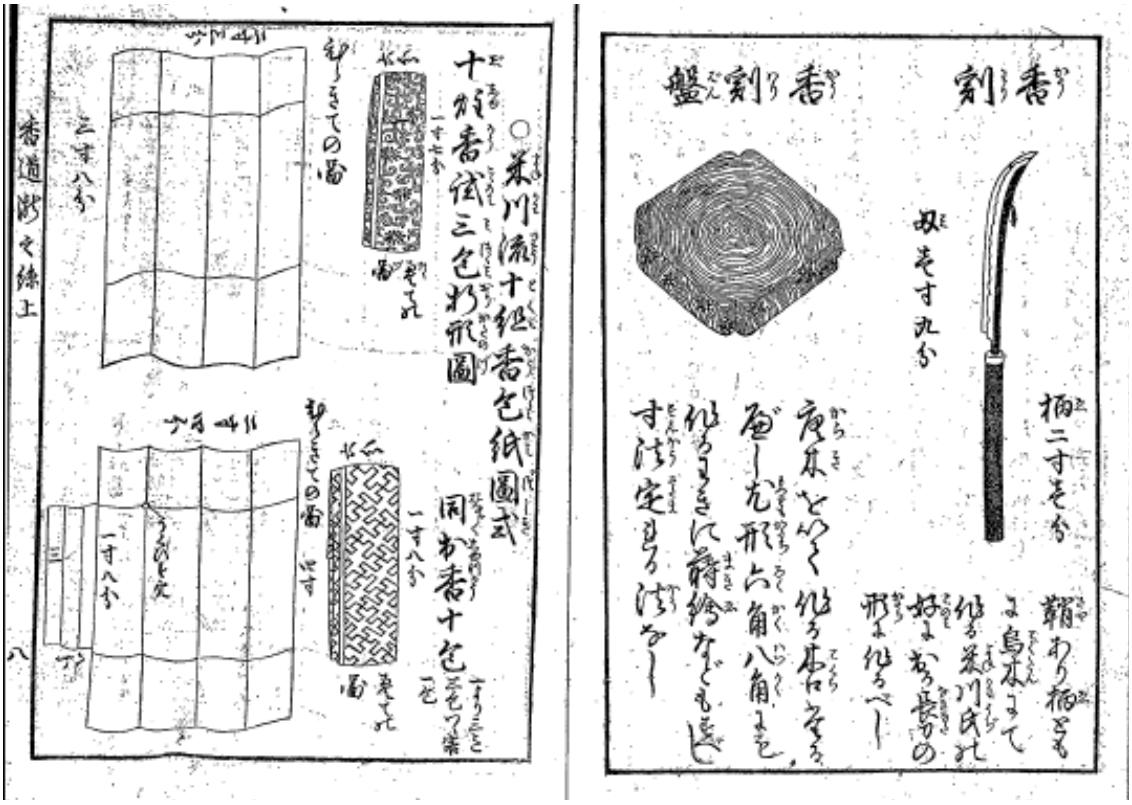
恰好、見合わせたるべし。或いは、蒔絵をもすべし。



火末入（ひずえいれ）
紅唐糸のあみ袋に入れる。
札筒にもかくのごとくの細（あみ）の袋あるべし。
［図］
火末入恰好、定法なし。見合わせ、物好き次第たるべし。
［図］
火筋建（こじたて）、形色々あり。
恰好、物好き次第。
おもくして倒（こけ）ざるをよしとす。
金（かね）にて作るべし。
［図］
銀葉入（ぎんよういれ）
［図］
十炷香箱（じっしゅこうばこ）

［図］
炭団入（たどんいれ）、中にかけご（懸籠）あり。
染墨（そめずみ）を入れる。

香道具の数多しといえども、先ずあらましの要具かくのごとし。委しくは『香道秋の光』続編にのせて、これを弁し侍る。香爐、火取（ひどり）などの図は『香道秘伝』にあれば、今ここにもらしぬ。香爐は磁器（やきもの）よし。志野家には、凡そ三寸四方のものを用ゆ。米川もこれに同じ。当流の事は、別に説あり。古来用い来る箱の寸法、定まれる式なし。ただ用ゆるに勝手よく、恰好、人の好みに随い作るべし。近頃二重に作るもの用ゆるによろし。外に袋あるべし。長緒をつく（付）る。寸法、または、むすびようなど口伝あり。その外、うちの小道具ども、みな袋あるべし。共に長緒をつくる。さまざまむすびかゆるに品あり。古き具の織物（えぶつ）、食物などをいれし類のものを香具に用ゆる事あるべからず。



香割(こうわり)

刃 一寸九分　柄 二寸一分

［図］

鞘あり。柄ともに烏木(こくたん)にて作る。

米川氏の好みになる長刀の形に作るべし。

香割盤(こうわりばん)

［図］

唐木を以って作る。木口たるべし。

尤も形六角、八角にも作る。

わきに蒔絵などもすべし。

寸法定まれる法なし。

○ 米川流十組香包紙図式

十炷香試三包折形の図

畳みての図　(縦)一寸七分 (横)六分

ひらきての図 (縦)三寸八分 (横)二寸三分

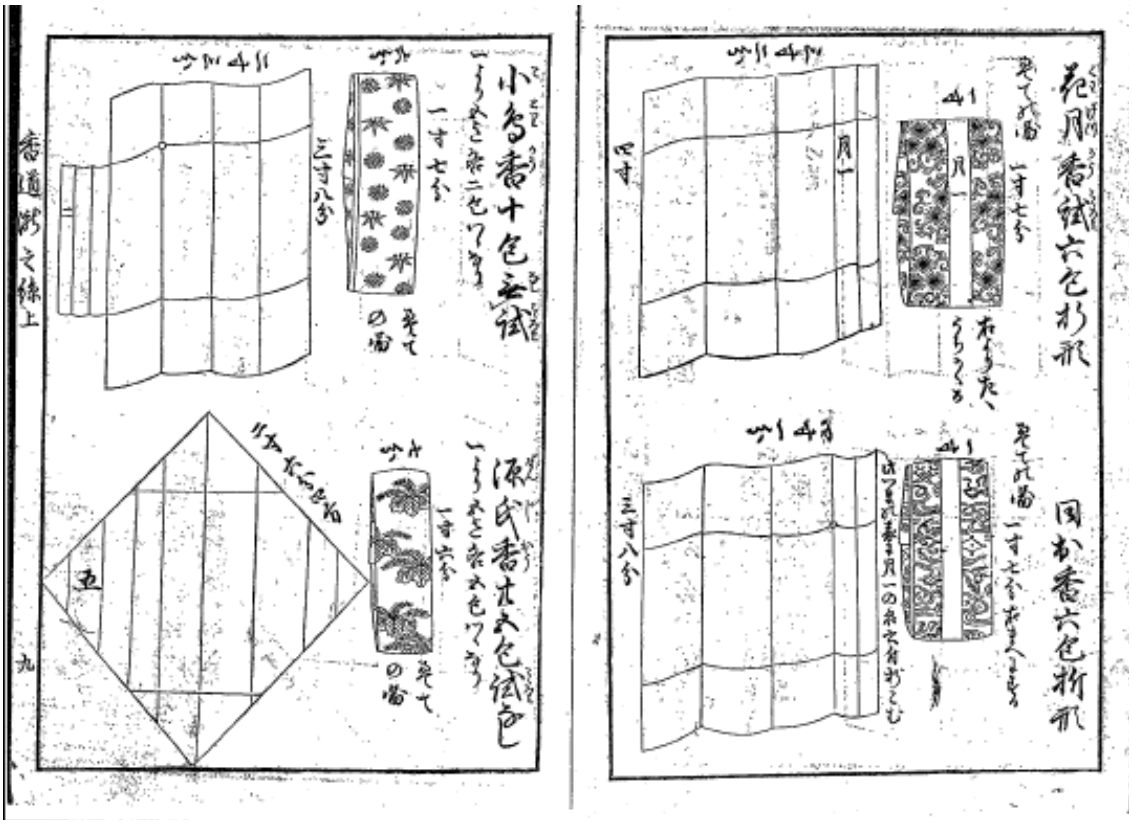
同じく出香十包

「一」から「三」まで、三包ずつ、「客」一包

畳みての図　(縦)一寸八分 (横)六分

ひらきての図 (縦)四寸 (横)二寸四分

(隠し縦)一寸八分、(隠し横)八分



花月香試六包折形

畳みての図　（縦）一寸七分（横）一寸

右より左へうちかくる。

ひらきての図（縦）三寸二分（横）四寸

同じく出香六包折形

畳みての図　（縦）一寸七分、右まえにする。（横）一寸

ひらきての図（縦）四寸一分（横）三寸八分

このつま（端）の表に「月一」の名書き付け折りこむ。

小鳥香十包無試（こころみなし）

「一」より「五」まで、各二包ずつなり。

畳みての図　（縦）一寸七分（横）六分

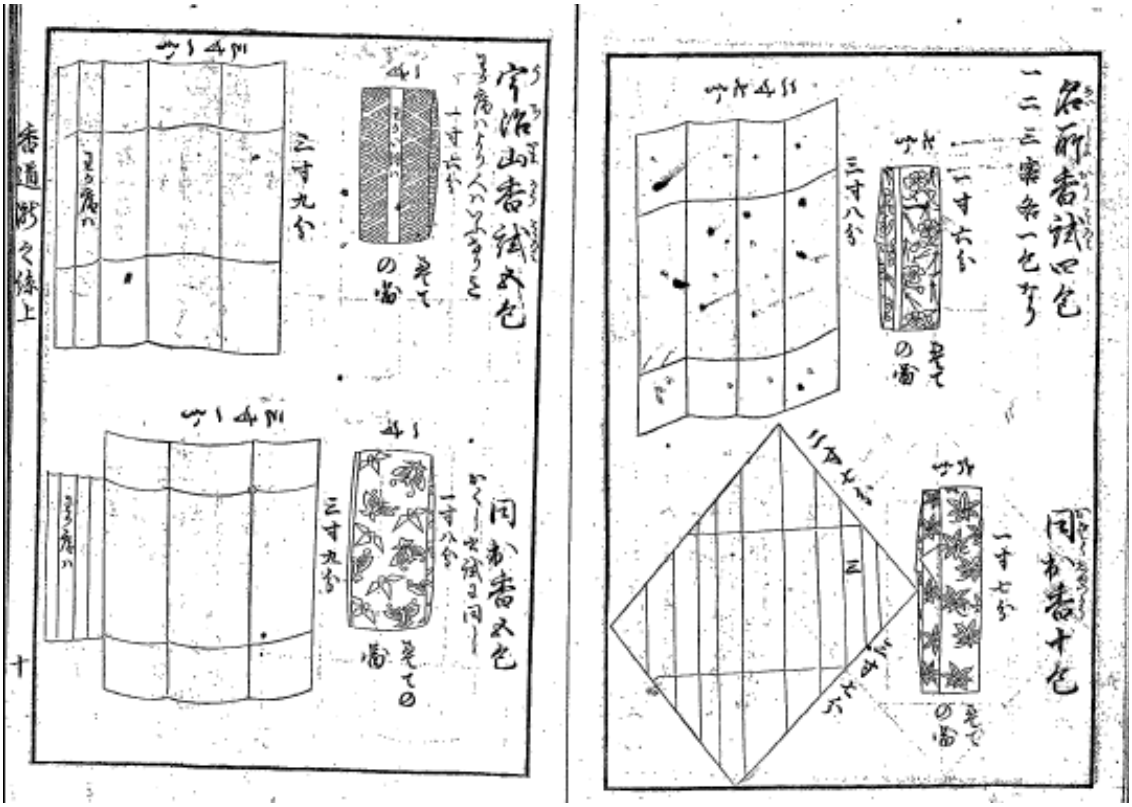
ひらきての図（縦）三寸八分（横）二寸三分

源氏香廿（二十）五包試みなし

「一」より「五」まで、各五包ずつなり。

畳みての図　（縦）一寸六分（横）七分

ひらきての図（縦・横）二寸六分四方



名所香試四包

「一」、「二」、「三」、「客」、各一包なり。

畳みての図　（縦）一寸六分　（横）七分

ひらきての図　（縦）三寸八分　（横）二寸七分

同じく出香十包

畳みての図　（縦）一寸七分　（横）六分

ひらきての図　（縦）三寸七分　（横）二寸七分

宇治山香試五包

「わが庵は」より「人はいふなり」まで

畳みての図　（縦）一寸六分　（横）一寸

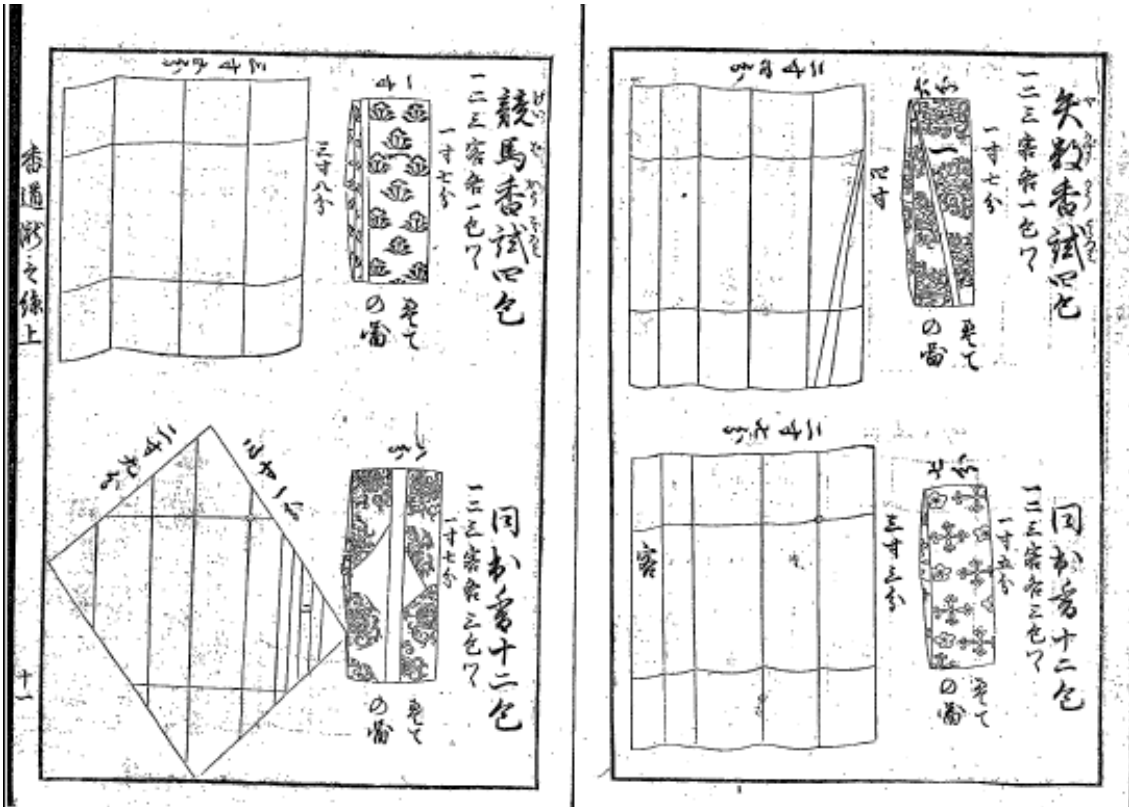
ひらきての図　（縦）三寸九分　（横）三寸一分

同じく出香十包

かくし書き、試みに同じ。

畳みての図　（縦）一寸八分　（横）一寸

ひらきての図　（縦）三寸九分　（横）三寸一分



矢数香試四包

「一」、「二」、「三」、「客」、各一包ずつ。

畳みての図　（縦）一寸七分（横）六分

ひらきての図（縦）四寸（横）二寸四分

同じく出香十二包

「一」、「二」、「三」、「客」、各三包ずつ。

畳みての図　（縦）一寸五分（横）七分

ひらきての図（縦）三寸三分（横）二寸七分

競馬香試四包

「一」、「二」、「三」、「客」、各一包ずつ。

畳みての図　（縦）一寸七分（横）一寸

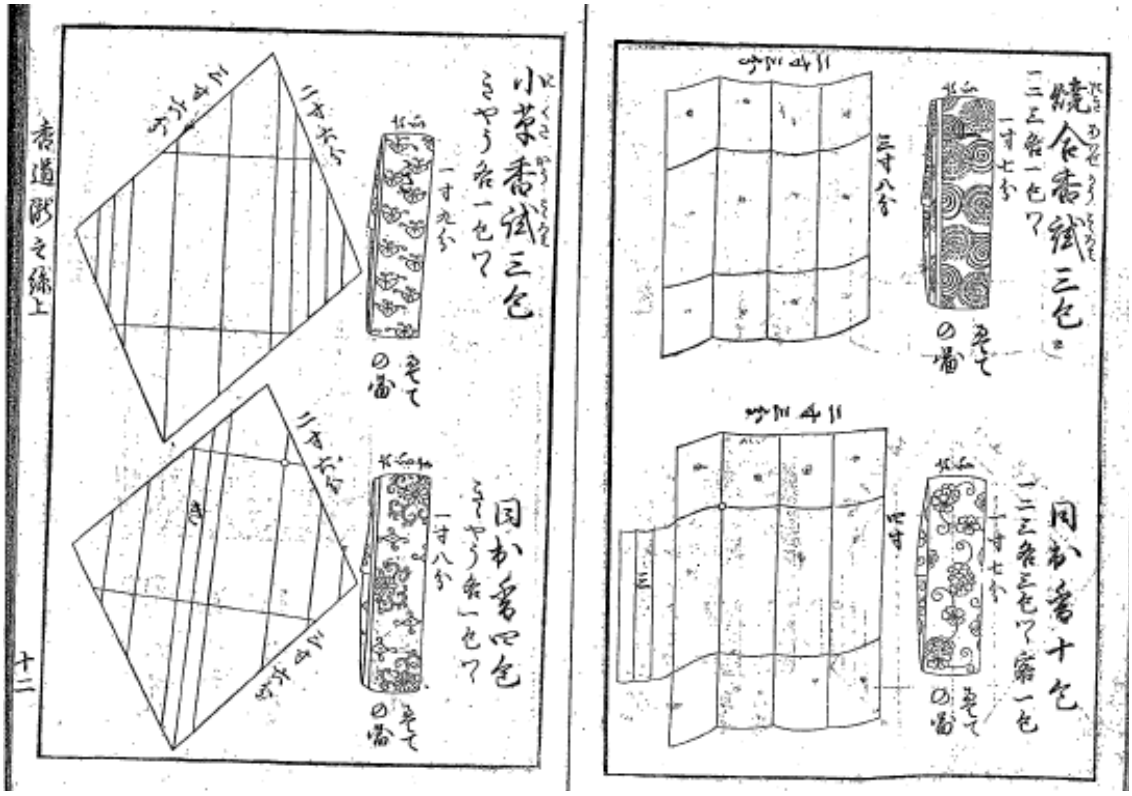
ひらきての図（縦）三寸八分（横）三寸五分

同じく本香十二包

「一」、「二」、「三」、「客」、各三包ずつ。

畳みての図　（縦）一寸七分（横）八分

ひらきての図（縦）三寸一分（横）二寸九分



焼合香試三包

「一」、「二」、「三」、「客」、各一包ずつ。

畳みての図　（縦）一寸七分（横）六分

ひらきての図（縦）三寸八分（横）二寸三分

同じく出香十包

「一」、「二」、「三」、各三包ずつ。「客」一包。

畳みての図　（縦）一寸七分（横）六分

ひらきての図（縦）四寸（横）二寸三分

小草香試三包

「き」、「や」、「う」、各一包ずつ。（桔梗の場合）

畳みての図　（縦）一寸九分（横）六分

ひらきての図（縦）二寸六分（横）三寸六分

同じく出香四包

「き」、「き」、「や」、「う」、各一包ずつ。

畳みての図　（縦）一寸八分（横）六分

ひらきての図（縦）二寸六分（横）三寸六分

惣包の式法

摺（畳）みての寸法　幅二寸五分、竪三寸二分、折りかけ　五分

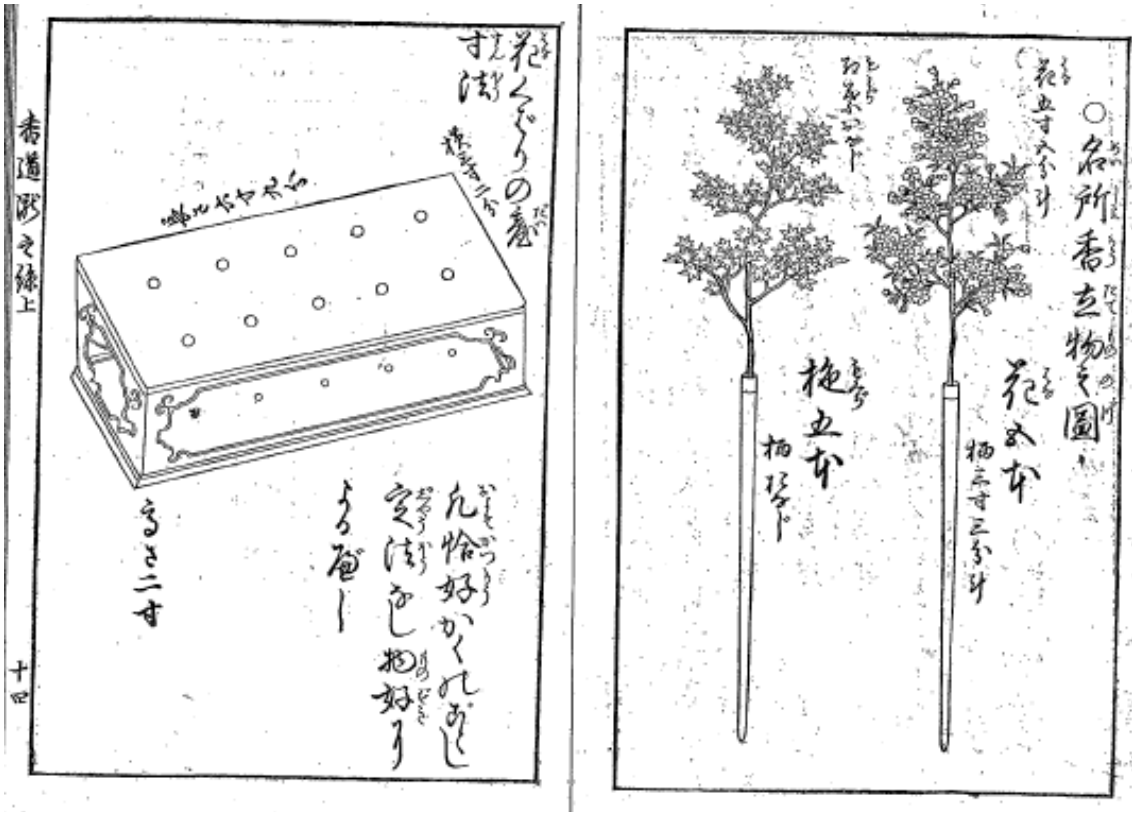
［図］　開きての寸法　竪七寸、横五寸五分

右、惣包、米川流には左まえ（前）にかかる。裏、金銀の紙、表、金銀の絹地、極彩色に絵を書くべし。ほかに織物の袋あり。模様の絵は、それぞれの香の心を絵がく（描く）べし。

○十炷香は、松竹梅を画く（描く）
○小鳥香は、小鳥飛びかうを画く
○小草香は、桔梗、草花などを画く
○宇治山香は、うぢ山橋の景を画く
○源氏香は、式部、石山に篭る景
○名所香は吉野山、龍田山を画く
○矢数香は、矢、弓、麾、などを画く
○花月香は桜に月を絵がく
○競馬香は競馬かけちがう図
○焼合香は柴に花折り添えたるを画く

「連理香」の時は、連理の枝ある木を画くべし。当流には模様どり、少々ちがいあり。右は米川流、世上通用の絵図なり。中の小包も当流は右の図に異なり。

○盤立物寸法の図式



○名所香立物の図

「花」五本
花、五寸五分ばかり　柄、三寸三分ばかり
［図］

「椹（もみじ＝紅葉）」五本
紅葉、おなじ　柄、おなじ
［図］

「花くばりの臺」寸法
凡そ恰好かくのごとし。
定法なし。物好きに
よるべし。
［図］
横三寸二分　長さ六寸九分　高さ二寸

［名所香盤の図］

盤の図かくりごとし。長一尺二寸五分ばかり。横一尺五分ばかり。足の高さ六分。分取場の幅二寸。二つの穴の間一寸ずつにて恰好よし。最も定まれる法なし。

○競馬香盤立物の図

「青楓」一本　「勝負の樹」と云う。

［図］

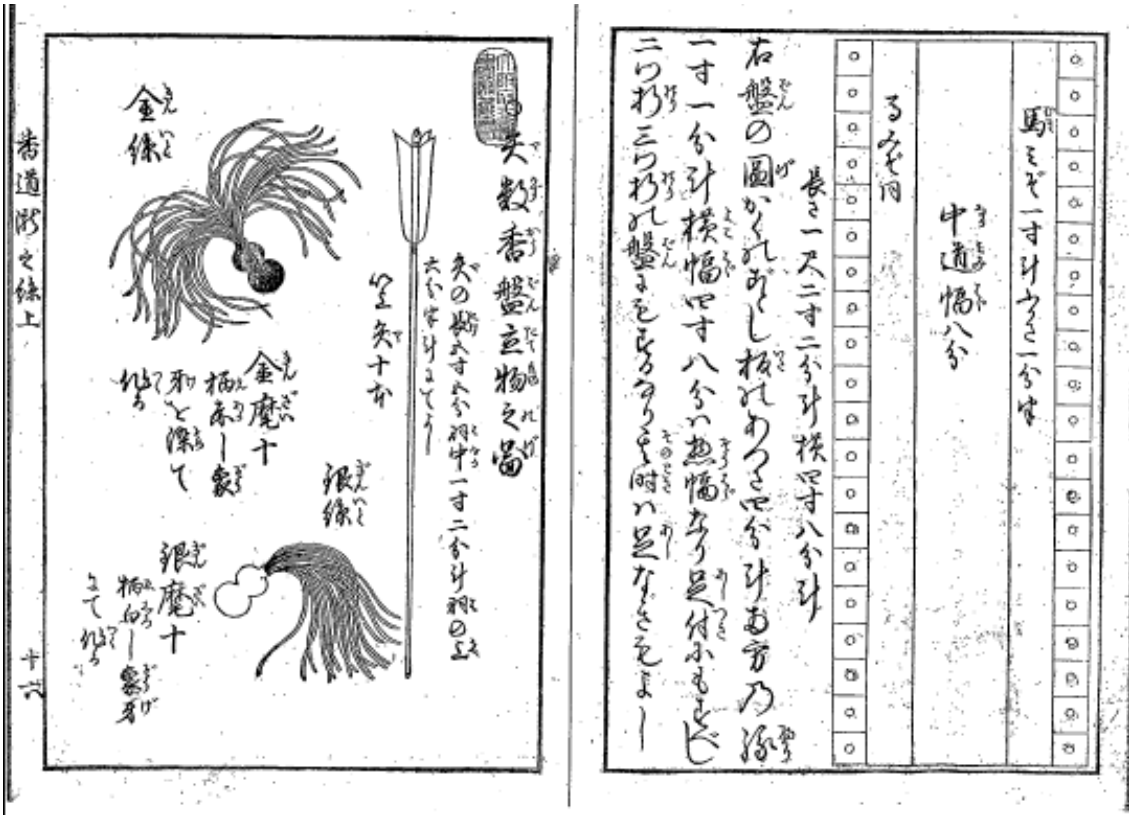
楓の高さ、二寸五分ばかり　柄、三寸二分

［図］

「赤方」、「黒方」　競馬人形二つ

（台座の寸法）（縦）一寸六分、（横）九分

賀茂の競馬出で立ちには、馬に大ぶさ（房）なしと云えども、香の立物なれば、艶雅の餝（かざり）のため、ふさあるがよし。



［競馬香盤の図］

馬溝、一寸ばかり、ふかさ一分半

中道、幅八分

馬みぞ、同じ

長さ一尺二寸二分ばかり、横四寸八分ばかり

右、盤の図かくのごとし。板のあつさ四分ばかり。両方の縁一寸一分ばかり。横幅四寸八分は惣幅なり。足付きにもすべし。二つ折り、三つ折りの盤にもするなり。その時は足なきもよし。

○矢数香盤立物の図

矢の長五寸五分、羽中一寸二分ばかり。羽の上六分半ばかりにてよし。

［図］

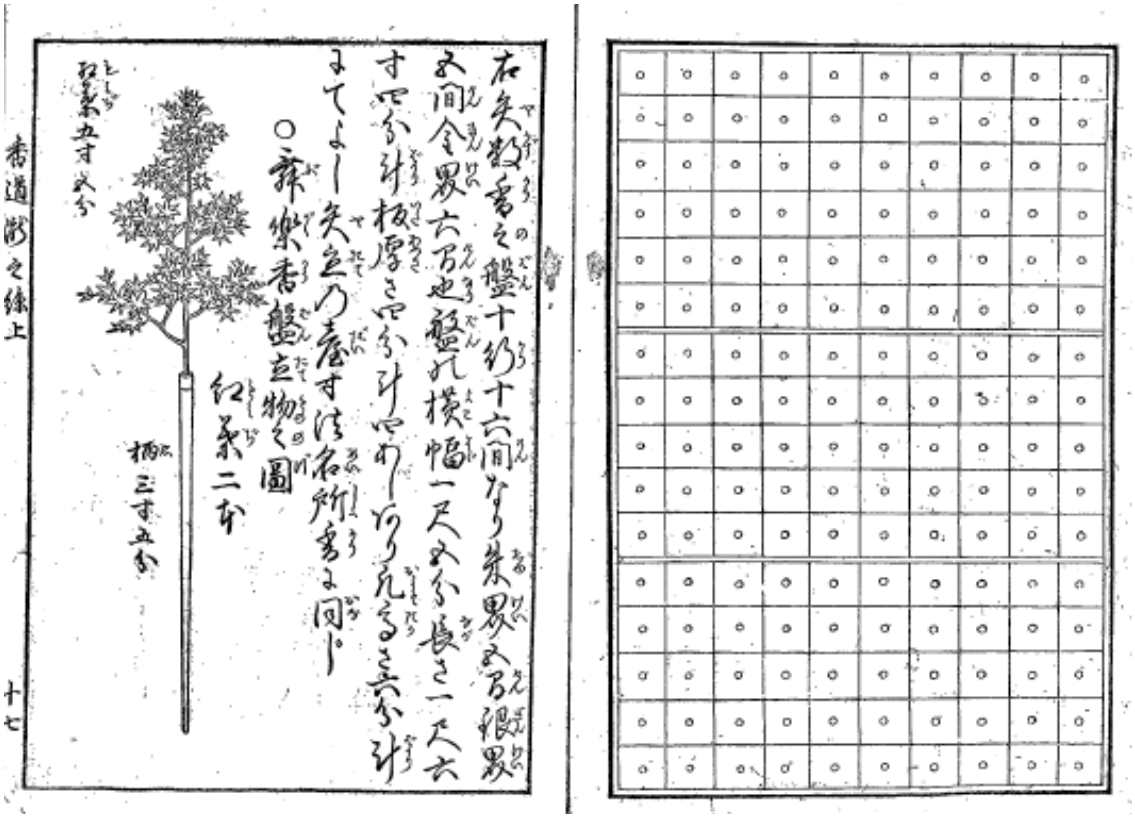
以上矢十本

「金麾(きんざい)」十

［図］金絲、柄赤し。象牙を染めて作る。

「銀麾(ぎんざい)」十

［図］銀絲、柄白し。象牙にて作る。



［矢数香盤の図］

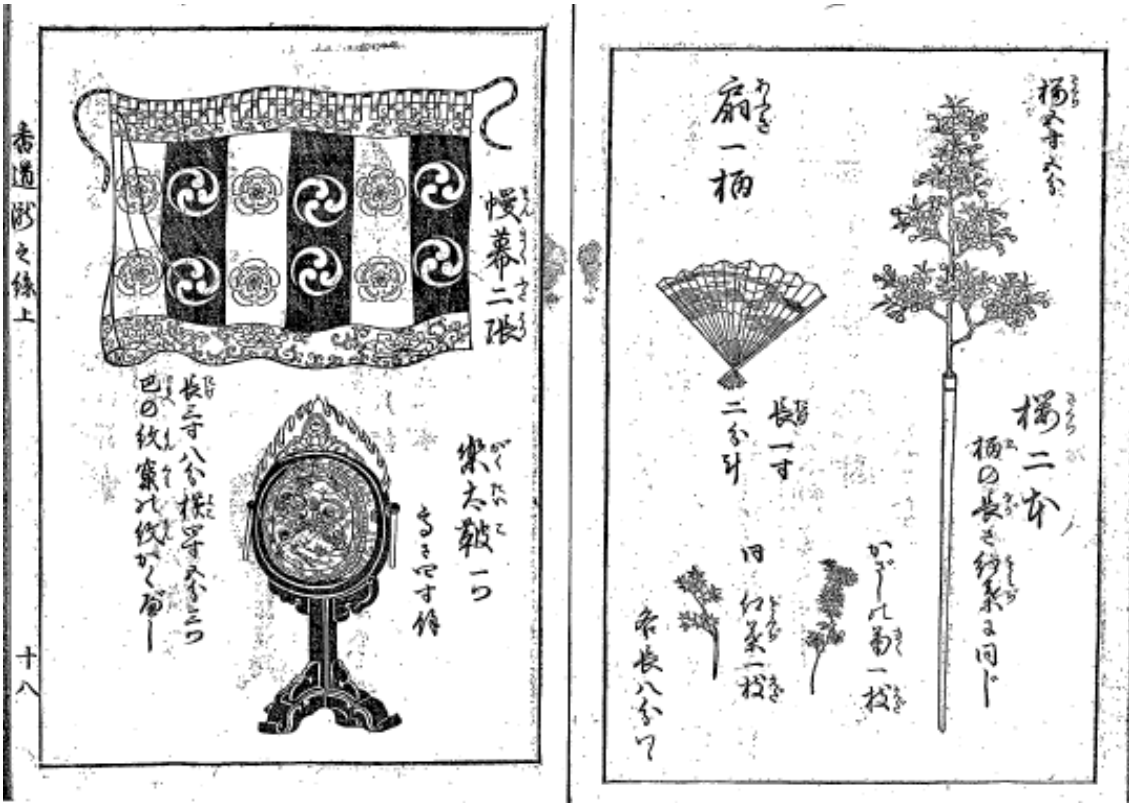
右、矢数香の盤十行、十六間なり。朱界(けい)五間、銀界五間、金界六間なり。盤の横幅一尺五分、長さ一尺六寸四分ばかり。板厚さ四分ばかり。四あし(足)あり。凡そ高さ六分ばかりにてよし。矢立の臺寸法、「名所香」に同じ。

○舞楽香盤立物の図

「紅葉」二本

［図］

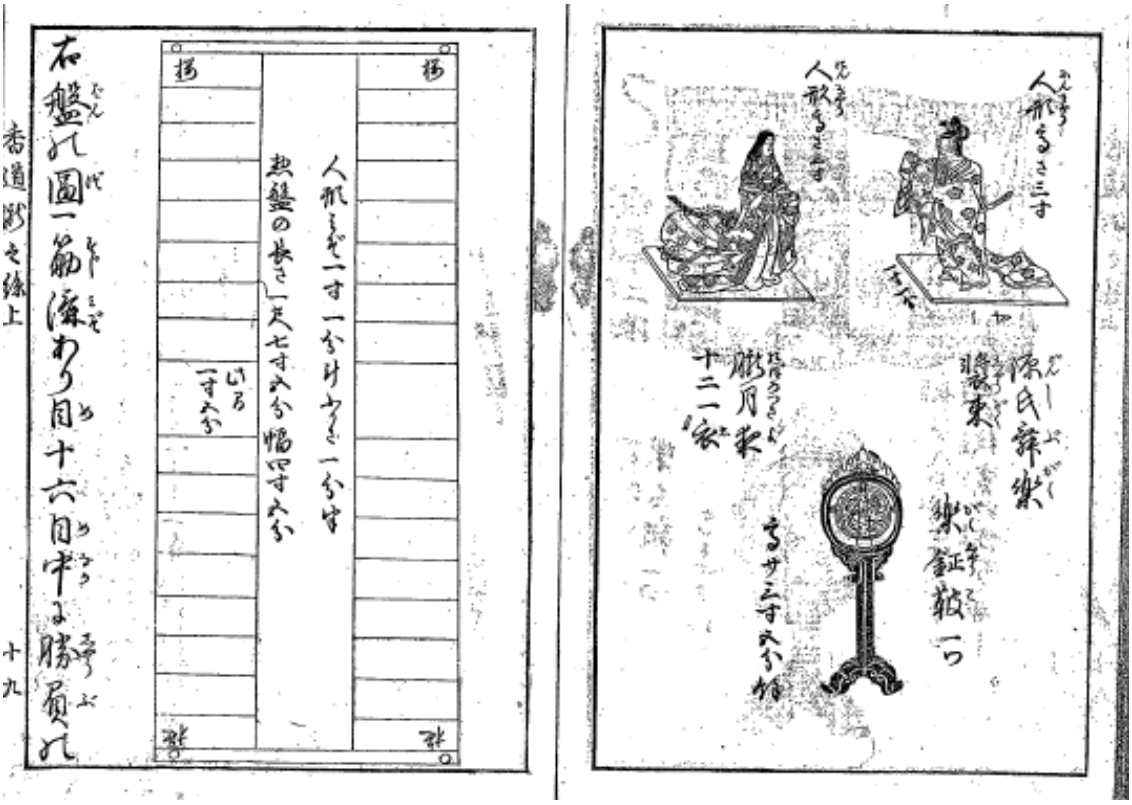
紅葉、五寸五分　柄、三寸五分



「桜」二本
［図］
桜、五寸五分　柄の長さ、紅葉に同じ
「扇」一柄
［図］
長一寸二分ばかり
「かざしの菊」一枝
［図］
同じく「(かざしの)紅葉」一枝
［図］
各、長八分ずつ

「幔幕(まんまく)」二張
［図］
長三寸八分、横四寸五分。三つ巴の紋、
窠の紋(かのもん＝木瓜紋→有職文様)かくべし。

「楽太鼓」一つ
［図］
高さ四寸餘り



［源氏］舞楽装束

［図］

人形　高さ三寸

［朧月夜］十二一衣

［図］

人形　高さ三寸

（台座の寸法　縦一寸、横一寸一分）

［楽鉦鼓］一つ

［図］

高さ　三寸五分餘り

［舞楽香盤の図］

人形みぞ　一寸一分ばかり。ふかさ一分半

惣盤の長さ　一尺七寸五分、幅四寸五分

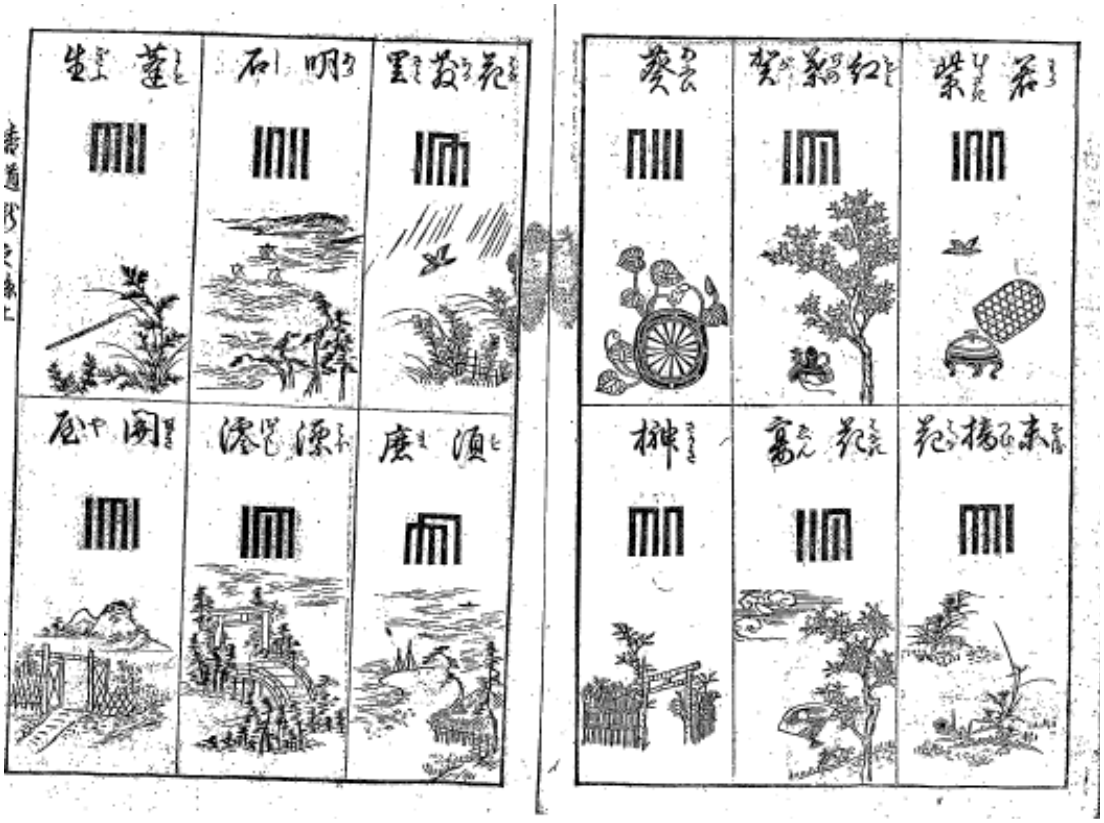
（勝負場）この間一寸五分

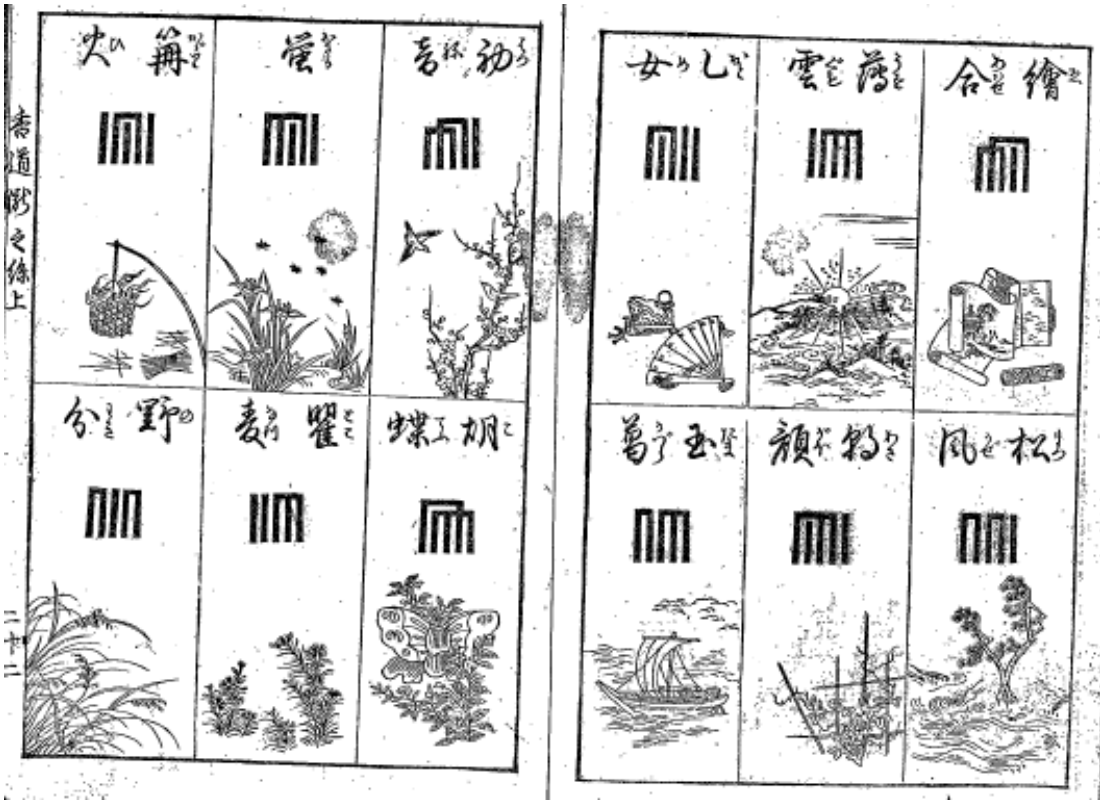
右、盤の図一筋溝あり。目十六目、中に勝負の

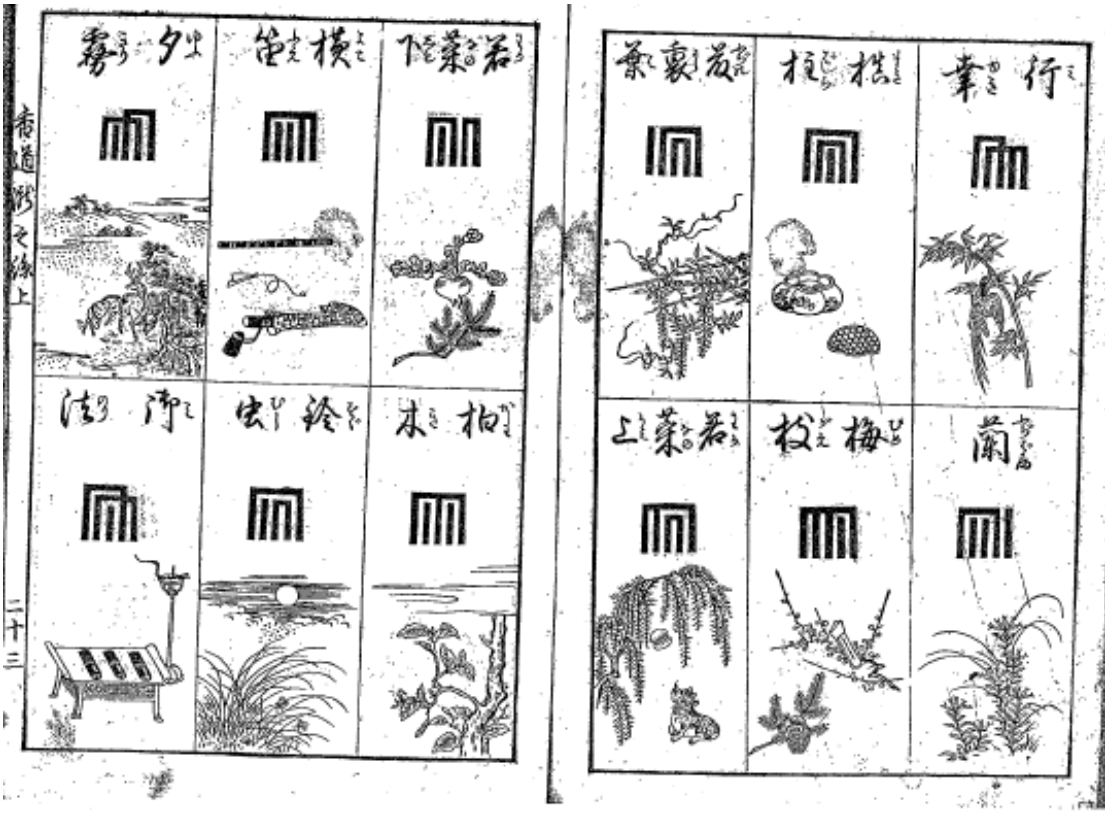
場あり。「源氏方」もみぢ（紅葉）後ろに太鼓、「朧付夜方」桜に鉦鼓。盤足あり七分ばかり。太鼓、鉦鼓、立物の後ろ盤の外に小さき臺を拵えおくべし。二本の桜、紅葉の間、幔幕を引きてしぼるべし。

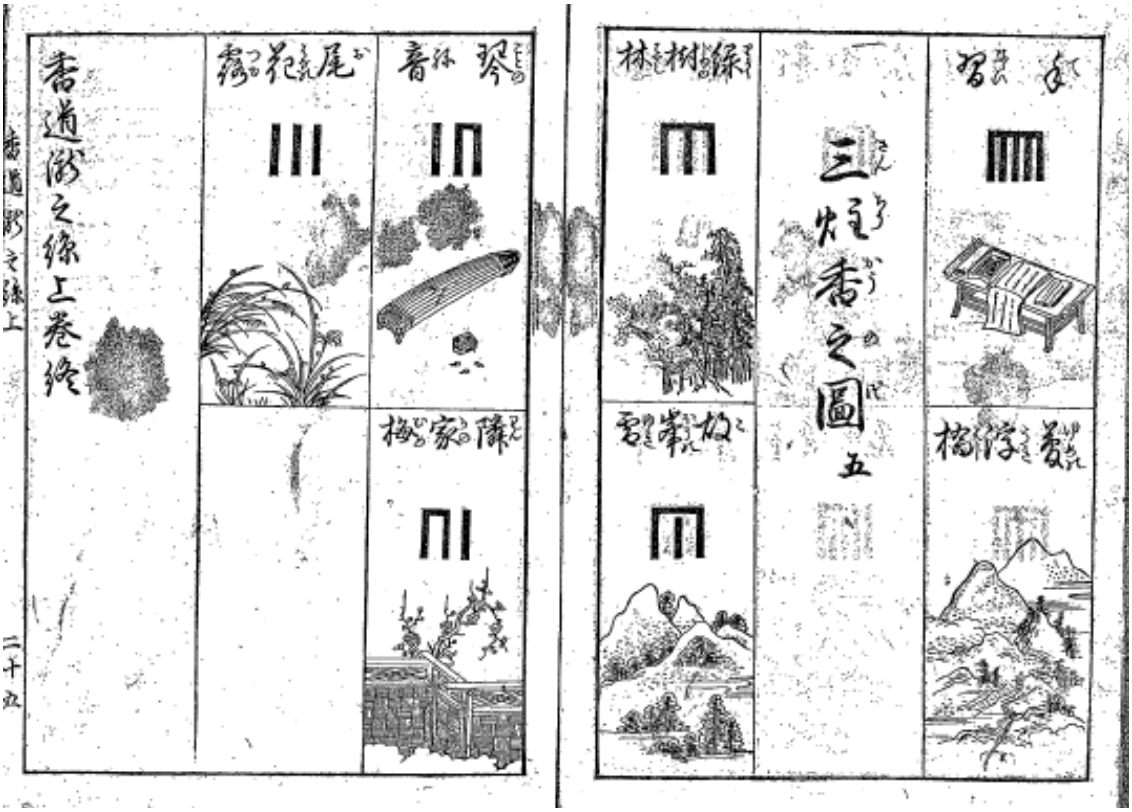
改正源氏香の図　五十二

［香の図］（巻名は省略）


蓬生
石明
花菱里
麥
賀茂紅
若紫
庵
源氏
須磨
榊
藤花
末摘花


箒木
螢
帚木
女しな
雲隱
合繪
野分
螺鈿
朧月
玉鬘
賴母
松風


香道鑑之條上
二十三
夕霧
横笛
若菜下
行幸
若菜裏葉
柏木
椎本
蘭
若菜上
梅枝
御法
鈴虫
柏木
香道鑑之條上
二十四
総角
宇治
浮舟
幻
竹川
橋姫
宿木
紅梅
椎本
宇治
東屋
蜻蛉



三炷香の図 五

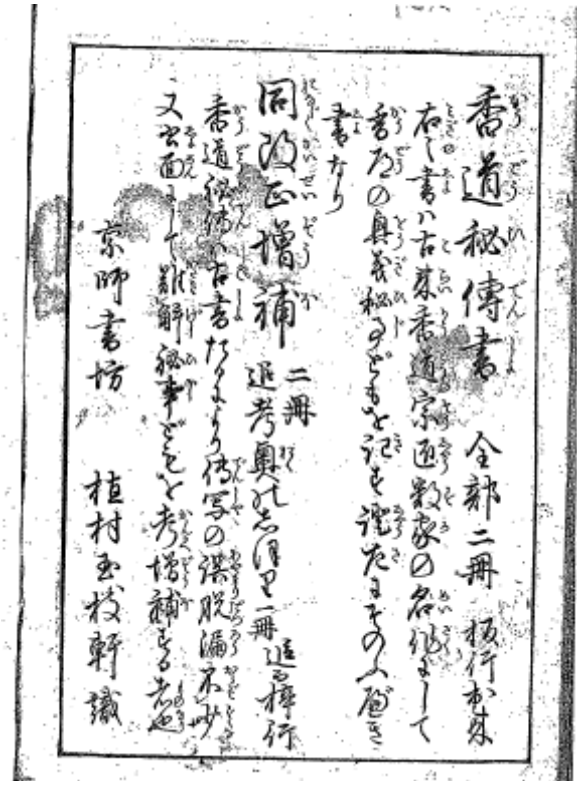
［香の図］

緑樹の林　故峯の雪

琴の音　隣家の梅

尾花の露

香道瀧之緑上巻終り



香道秘傳書　全部二冊　板行出来

右の書は古来香道の宗匠数家の名作にして香道の奥義秘事どもを記す。證左にそのうべき書なり。

同改正増補　二冊　追考　奥のしほり一冊　追つて梓行

香道秘伝は、古書たるにより、伝写の誤り、脱漏少なからず。また、書面にして解し難き秘事どもを考え、増補する者なり。

京師書坊　植村玉枝軒識

令和二年四月

『香筵雅遊』國井和裕